「レスプリ・ヌーヴォー」期におけるピエール・ウィンターの身体文化理論

ル・コルビュジエとその協働者ピエール・ウィンターの身体文化理論に関する研究 その1

THE THEORY OF BODY CULTURE OF PIERRE WINTER
IN THE PERIOD OF "L'ESPRIT NOUVEAU"

A study on the theories of body culture of Le Corbusier and Pierre Winter, his collaborator Part 1

森山 学*

Manabu MORIYAMA

The purpose of this study is to clarify the theories of body culture for Le Corbusier and Pierre Winter, his collaborator, and the relation between them and their architectural theories. This paper deals with Winter's theory in the period of "L'Esprit Nouveau". Body culture was a way to be healthy in modern interpretation. "L'Esprit Nouveau" stuck to records and machine in the sports column. But Winter who wrote papers for this journal, argued it in relation to health. His body culture leads human body to 'le corps nouveau', his new concept. Furthermore it decides life schedule and structure of city.

Keywords: Le Corbusier, Pierre Winter, l'Esprit Nouveau, Body culture, sports

ル・コルビュジエ, ピエール・ウィンター, レスプリ・ヌーヴォー, 身体文化, スポーツ

1. はじめに

本論文は、建築家ル・コルビュジエ Le Corbusier (1887-1965) と彼の協働者である医師ピエール・ウィンター Pierre Winter (1891-1952) 両名の「スポーツ le sport」¹をはじめとする「身体文化」²に対する考え、ならびに彼らの建築理論及び実践とそれとの関係を明らかにすることを目的としている。このとき、身体文化は健康希求の手段として、さらに遡及して生との関係の中で建築と結びつくのを示すことができるだろう。

今回は彼らの初期の協働時期である雑誌「レスプリ・ヌーヴォー l'Esprit Nouveau」の編集時期におけるウィンターの身体文化観と、「レスプリ・ヌーヴォー」誌が表現した身体文化を明らかにする。

2. 近代における身体文化と近代建築における身体文化

まずはル・コルビュジエに代表される近代建築の諸相を明らかにするために、身体文化が着目されなければならない理由を述べる。いわゆる近代建築運動が掲げた重要なパラダイムの一つに「衛生」の理念が挙げられる。この衛生対策は本来、人間の「健康」を目的としており、衛生は当時の健康への志向性という心性に應える手法として位置づけられる。衛生と同じ健康希求の方法として、より近代的な性格を示すのが身体文化なのである。

例えば、E. ブロッホは近代的な健康のあり方とは「病気であることを全然前提としない回復、むしろ健康そのものの動詞であり行為である回復、まさに病気というものをもたない治癒」³であるとし、

積極的、自発的な希求と行為によって日常的に邁進されるものとした。このような心性はル・コルビュジエやウィンターにも共通である。

L. マンフォードは、都市、建築におけるこのような態度の現れを「過ぎ去りつつある時代が、一（略）一莫大な病院建築を誇ったのに対し、生技術時代の象徴は都市が持つことのできる沢山の運動場や水泳場や海水浴場であろう」⁴と指摘した。「近代建築の歴史はサナトリウムに満ちている」⁵と述べた B. コロミーナの言葉以上に彼の言葉は、近代建築を近代的健康という点から顧みる上で重要である。

近代のこのような身体文化の現れは、グーツムーツ Johan Christian Friedrich Guts Muths (1759-1839) に始まる 19 世紀ドイツにおけるギムナステイクの大きな潮流をまずは生み出した。身体活動を測定し、各部位を分割して理解する合理的潮流であった。ギムナステイク（フランス語のジムナスティーク）はアモロス Don Francisco Amoros (1770-1848) によってフランスにも導入された。

19 世紀から 20 世紀の転換期には、身体運動のこうした理解は再検討される。例えば 19 世紀末のドイツ青年運動や裸体主義、オーストリアのガウルホーファー Karl Gaulhofer (1885-1941) による自然体育の創始、ダルクローズ Émile Jaques-Dalcroze (1865-1950) によるリトミック、フランスにおいてはエベール Georges Hebert (1875-1957) のメトード・ナチュレルがそうした反合理主義、自然な身体運動を重視する流れを作り出す。イギリスを源流とするスポーツがギムナステイクに代わり流行する傾向も同様である。クーベルタン Pierre de Coubertin (1863-1937) が近代オリンピックを創

本研究は2001年度東京大学大学院学位申請論文を加筆修正したものである。

* 八代工業高等専門学校土木建築工学科 講師・博士(工学)

Lecturer, Dept. of Civil and Architectural Engineering, Yatsushiro National College of Technology, Dr. Eng.

始(1896)した背景がここにある。

大気浴療法や、19世紀のシュレーパー Daniel Gottlob Moritz Schreber (1808-1861) による整形外科治療での医療体操等の具体的な導入例を挙げるまでもなく、上記の二つの潮流は健康の獲得を一つの目的として掲げている。

このような身体文化の流行は芸術や建築へも影響を与える。例えば近代オリンピックでは、クーベルタンの趣旨に基づき、建築設計競技も含めた文学・芸術コンクールが創始された(1908)。エコール・デ・ボザールにおいても、1852年に初めて身体文化の場である「ジムナズ」をローマ大賞の課題としている。フランスで1851年にリセにジムナスティックの教科を導入する法律が制定、1852年に「軍隊ジムナスティック師範学校」が創設された時代である。

そこで近代建築運動をみてもみる。まずは1930年に創刊された「今日の建築 L'Architecture d'Aujourd'hui」誌の週末住宅を特集した1936年1月号の表紙を取り上げる【図1】。この建物はコズマ L. Kozma 設計の週末住宅(1936)である。二階の片持ち梁で突き出されたテラスの上に、ショートパンツとビキニといった軽装の二人の女性が立っている。住宅はトリミングされて、まるで小型船舶のブリッジか飛び込み台のように演出されている。雑誌をめくり作品掲載ページを見ると、この飛び込み台は実際水面上に突き出ているのが分かり、女性も今度は水着となっている。この年は人民戦線政府が余暇推進の実験的政策を行っていき、「1936年の精神」と呼ばれる雰囲気があった。こうした雰囲気を生み出した近代の傾向によって、この表紙は余暇を手にした近代の理想的生活や建物自身の近代精神を演出している。M. ウィグリーが近代建築の白い壁面にスポーツ・ウェアと同義の役割を認め、近代建築運動はスポーツ・ウェアをそのプロモーションに活用したと指摘したように、ここでも身体文化によるメディア効果が期待されていたことが推測できる⁶。

飛び込み台としての演出は、当時飛び込み台が近代的精神を表現するものとして捉えられていたためと考えられる。フランスでは19世紀末に至るまで、プールは身体を清潔にする施設と考えられていたが、その中であって飛び込み台はジムナスティックのマスト、登攀器具、跳躍台といった体操器具のようである。身体能力を訓練し、恐怖心を克服し、チャレンジ精神を培う体操器具の性質は、飛び込み台にも求められたに違いない。ファン・ルーヴェンは「治療法として機能する跳躍板は底知れぬ深さへのスイマーの根源的恐れを癒すことを意味する。高い板と飛び込み塔はまずは彼を練磨し、それから不安に打ち勝つよう彼を手助けした」⁷と述べている。

19世紀にはイスラム風の装飾が施されていたプールは、「今日の建築」誌1935年10月号のプール特集に見られるように、平滑な白い壁と高い飛び込み台によって代わられている【図2】。水面に突き出るその造形はダイバーのチャレンジ精神、競技精神を体現しているかのようである。ル・コルビュジェもまたプールについて、飛び込み台までもがある様式に基づいて作られることを批判している⁸。

このようなことから、近代性を演出しようとする個人住宅にも飛び込み台のデザイン・モチーフが導入されることになる【図3】。

次に単なる演出ではなく、近代建築に身体文化の場が用意されている事例を取り上げる。【図4】はジョージ・グロス George Grosz (1893-1959) の絵画作品である。エンジンの図面が描かれた画架、立方体のオブジェ、T定規が置かれた室内で、機械人形のような人

【図1】「今日の建築」(1936.1) : 【図2】G. ボシオ「フィレンツェのプールとゴルフ場」(1935?)

【図3】L. ザク「ブラ近郊の個人邸宅」(1934?)

【図4】G. グロス「新しい人間」(1920)

【図5】R. デッカー「ワイゼンホッフ・ジードルン House22」(1927)

【図6】フィジリ&ポリーニ「報道関係者村の家」(1934)

物がパンチング・ボールを前に運動している。極度な機械化の新しい時代において、人間は身体鍛錬に余念がない。1920年代のフランスでは、知識人たちは文学サロンのように競技場に集い、書斎ではパンチング・ボールで仕事の合間に鍛錬していたという報告がある⁹。前者は、鍛錬する青年の裸体を観察するために芸術家が集った古代ギリシャのパライストラの風景を髣髴させ、後者はグロスの絵画のように、黙々と孤独に健康へと邁進する理想的近代人のあり方を示している。近代建築家たちは、彼らの設計する住宅に後者のための場を設けた【図5-6】。そこに備えられる設備は、パンチング・ボール、登攀ロープ、吊り輪、肋木、プール等であった。

3. 「レスブリ・ヌーヴォー」誌における身体文化

「新精神」という意味をタイトルに持つ当誌(1920.10-1925.1)は、ル・コルビュジェと画家アメデ・オザンファン Amédée Ozenfant (1886-1966) が、詩人ポール・デルメ Paul Dermée を編集長として創刊した雑誌である。

オザンファンはル・コルビュジェにとって、画家としての導き手であるだけでなく、近代的な様々な活動に造詣が深い理想的な近代人であった。オートレーサーでもあり自動車もデザインする彼は、スポーツマンとしても理想的近代人に該当した。

創刊号の表紙には副題として「美学の国際的雑誌」と書かれ、続いて当誌の主題が列挙されている。その中には建築や音楽、技術者の美学とともに「スポーツ sports」が含まれている。デルメが抜けた後の第4号の表紙も副題が「現代活動の挿絵入り国際的雑誌」に

替るものの、やはりスポーツが含まれている。ル・コルビュジェとオザンファンの編集趣旨にスポーツは欠かせない要素であるとともに、他の項目と同様、決して美的対象ではなく現代活動、つまり「新精神」の通底する活動として捉えられていることが分かる。

ちなみに 1921 年時点でフランスのスポーツ関係の定期刊行物は 93 誌あったようである¹⁰、「デル・クヴェーアシュニット Der Querschnitt」のような芸術誌でもスポーツが報じられていた¹¹。

【表 1】は、当誌における身体文化関連の記事一覧である。これらはスポーツの試合結果や記録更新を報じるニュース記事（項目「種別」の○）と、ル・コルビュジェの兄アルベール・ジャンヌレ Albert Jeanneret (1885-1973) によるリトミックやウィンターによる「スポーツ le sport」等の身体文化に関する論文とに大別できる。ここではまずニュース記事に着目したい。著者不明のもののうち表中の*で示したものは、ウィンターの論文の前ページに掲載されていることからウィンターの執筆の可能性が高い。

これら記事には①他論文と比較してジャーナリズムの特色が強い、②自動車や飛行に関する記述が多い、という共通点が見られる。

①については各競技の結果を羅列し、その上最高記録を追求する記録主義的傾向が窺える。例えば新記録が樹立された時には「時速 128 km という二輪車速度の世界記録を打ち立てた」と報告し、更新ならなかった時には「新記録は準備中である」と記された¹²。またヴ

ォワザン社の広告ページでは自社の自動車がオートレースで上位独占したことを伝えている¹³。この姿勢は身体文化の健康追求の側面とは異なり、前述のチャレンジ精神から端を発し、その結果としての記録そのものを重要視するものであり、ホイジンガ Johan Huizinga (1872-1945) に代表されるように¹⁴、身体文化が資本主義経済の競争社会との関連で語られるようになる所以である。クーベルタンの「より速く、より高く、より強く」の標語は、彼自身の意図とは異なり¹⁵この姿勢を正当化するものとして受け取られた。

②についてはオートレースの結果、自動車展覧会、大陸横断記録等の多くの報告がされ、機械そのものにさえ言及する傾向が窺える。例えば時速 160 km で走る自動車、200m の高さから落下するパラシュート、80 時間で大陸横断に成功した飛行機等が報告される。

一方オザンファンはオートレースの効用として、記録主義やスペクタクルとしてではなく、むしろ自動車が経済的で合理的なものへと淘汰されていくことに期待している¹⁶。淘汰された機械はピュリスムが描いたグラスや皿等の日常品と同様に、四肢の延長として調和していると彼は唱えた。ル・コルビュジェもこの機械観を共有し、誌面でパルテノンとドゥラージュ社のスポーツカーの写真を対照的に配置し、パルテノンを淘汰された機械として示した¹⁷。

機械に偏ったスポーツ観の背景には①19 世紀以来の「スポーツ le sport」概念の定義の不明確さ、②自動車等の運転は当初一般人よりスポーツマンによって運転されたこと、③新記録を期待する心性に驚異のパフォーマンスで応えていること、④技術者のチャレンジ精神をスポーツがもつ近代的精神に重ね合わせていること、が考えられる。さらにオザンファンの主張からは、「新精神」を論じるにあたり、それが通底する両者をあらためて区別する必要はないと考えていたと、予想できる。

4. ピエール・ウィンターの人物について

当誌の身体文化の記述において重要な位置づけにあったウィンターについて論じる前に、彼がル・コルビュジェとの協働関係においていかに重要な役割を演じたかについて、簡単に示したい。

彼は同種療法に従事する医師であり、身体文化を医療行為の一つとして捉え、主流である異種療法を行う医学界を批判している。第一次大戦では医療部隊の補助兵として活躍している。彼の肩書きは、ル・コルビュジェ財団に残る 1927 年頃の書簡から「医学診断センター」に勤務していることが分かり、同年の「新世紀」誌では「医師・外科医組合事務総長」であったことが分かる。また 1930 年の書簡には「医学部臨床実習指導医」、または「パリ市立病院元インターン」と書かれている。1931 年の書簡では「医学部元臨床実習指導医」と変化する。政治思想的にはジョルジュ・ヴァロワ Georges Valois (1878-1945) が 1925 年に結成したファシスト組織「フェイソー」を支持し、ル・コルビュジェをヴァロワに紹介したり、機関紙「新世紀」でル・コルビュジェの都市計画を紹介している。

彼がル・コルビュジェと出会うのは 1920 年代初頭である。彼自身の言葉によれば、「レスプリ・ヌーヴォー」誌を創刊号以来購読し、その思想に「完全合意」し、原稿「新身体 le corps nouveau」を持ってル・コルビュジェに会いに行っている¹⁸。この原稿は当誌 15 号 (1922.2) に掲載され、この時期 3 号にわたり論文掲載の機会を得ている。寄稿者の一人に過ぎなかったものの、ピエールフウ

【表 1】「レスプリ・ヌーヴォー」誌の身体文化関連の記事一覧

号数	タイトル	著者	種別
n°2	La Rythmique	Albert Jeanneret	
n°3	La Danse Futuriste	F. T. Marinetti	
	La Rythmique (Fin)	Albert Jeanneret	
n°5	Les Sports	Jean-Francis Laglenne	○
n°10	Nouvelles Hypothèses dans le domaine de la Physiologie et de la Médecine	Auguste Lumière	
	Souvenirs du Match Carpentier-Dempsey	Le Journal 誌, Paris-Midi 誌	○
	Les Sports	L'Auto 誌	○
n°11-12	Sports	Dr St-Quentin	○
n°13	La Médecine synthétique	Dr R. Allendy	
n°14	Boxeurs	Jean-Francis Laglenne	○
	Sports	Dr Winter	
n°15	Sports	*	○
	Le Corps nouveau	Dr Winter	
n°16	Actualités-sports	*	○
	Sports	Dr Winter	
n°17	Le Boxeur et son ombre	Maurice Raynal	○
n°18	Sports: Grand Prix de l'Automobile Club de France	O.	○
n°23	Première Olympique, le Paradis à l'ombre des épées, par Henry de Montherlant	Robert Aron	
n°27	Deux raids / un document		○
n°28	Sports	L'Auto 誌, Miroir des Sports 誌	○

François de Pierrefeu (1891-1959) によれば、「レスプリ・ヌーヴォー」運動のグループの一員として認識されていたことが分かる¹⁹。またル・コルビュジェは著書『パリの運命 *Destin de Paris*』(1941)で「レスプリ・ヌーヴォー」誌の論文一覧を示す際、自分の論文の他にはウィンターの論文のみ紹介しており、このことからル・コルビュジェののちの活動に与えた影響力が分かる。

また 1923 年にル・コルビュジェ、アルベールらを常任理事とし、アルベールを講師とした株式会社「フランス・リトミック身体教育学校」の設立にあたり、ウィンターは出資している²⁰。

プライベートでは、当時健康を害していたル・コルビュジェの健康相談にのり、処方として睡眠とスポーツを勧め、週 2 回、少なくとも 16 年間、バスケットボールを一緒にしている²¹。

二人が実際に協働するのは「プラン *Plans*」誌 (1931-32)、「プレリュード *Prélude*」紙 (1933-36) の編集の時期である。これらには多くのウィンターの論文が掲載された。1937 年には CIAM で「建築と医学」も発表している。

1930 年代初頭には、ル・コルビュジェが設計し彼自身が最上階のアパルトマンに住んでいた「ナンジェセル＝エ＝コリ通り 24 の集合住宅」(1933) に入居している²²。彼はここでの生活について、ル・コルビュジェとの共著の中で、「住まう喜び」を享受していると記し、「私は 10 年来この特権者の一人である。なぜなら私はル・コルビュジェの住居に住んでいるから」と続けている²³。

さらにル・コルビュジェが ASCORAL を結成 (1942) した際には幹部として協働している。この同年ル・コルビュジェと他二人とともに共著『建築と都市計画 *Architecture et urbanisme*』を出版している。またこの時期の成果を出版するべく大部の原稿を執筆しているが未出版に終わる。ル・コルビュジェはこの原稿のために序文を書き²⁴、出版のために手を尽くしている²⁵。

またこの時期、ル・コルビュジェの妻イヴォンヌの病に対して、処方などのアドバイスを与えていることも書簡から分かる²⁶。

ル・コルビュジェはウィンターの死に際し「彼の全人生はそれゆえ第一次世界大戦の終戦以来、我々のあらゆる仕事とともに深く結び付けられていました」と述べ、生涯にわたり協働関係があったことを伝えている。その協働関係においてウィンターが果たした役割は、ル・コルビュジェの言葉によれば「人間の幸福にとっての重要な要素である健康についての倫理観の問題を、あれほど寛容に正確にそして詳細に述べた」ということである²⁷。

5. ピエール・ウィンターの「新身体」概念

ウィンターは 1936 年に、当時の論文について「最近のスポーツ文学の到来よりずっと以前に、それは身体の喜びを賞揚し、その喜びに近代の生 (活) の中の真の意義と真の場所を付与した」と自己評価している²⁸。

19 世紀末、スポーツ文学の分野が登場し、20 世紀初頭にはオリンピックでのコンクール (1908-) も含め、いくつかのコンクールが組織されていた。1920 年にはフランスでスポーツ作家協会も設立されている。ただ「レスプリ・ヌーヴォー」誌でも書評に取り上げられたモンテルラン *Henry de Montherlant* (1896-1972) の著作等、フランスにおいて隆盛を誇るのは第 8 回オリンピック・パリ大会 (1924) 以降である。だとすればウィンターの自己評価は間違っ

ているとは言えない。しかもモンテルランの書評を書いたロベール・アロン *Robert Aron* が、それを「夢想的」で「詩的」すぎると批判している²⁹のに対し、ウィンターの論理的に記述された論文は、アロンの期待に応えるものであったろう。

さて彼が初めてル・コルビュジェに見せた原稿「新身体」のタイトルは、「レスプリ・ヌーヴォー＝新精神」を身体という視点から補完しようと意図したものであった。当誌は当初から「スポーツ」を取り扱う項目に挙げていたが、彼があえて「近代の人間の身体復興」や「身体から規律を引出し、結論を引き出す」ことを当誌に求めていることから分かる³⁰。この「新身体」概念は、彼の「レスプリ・ヌーヴォー」期の思想を読み解く鍵語であると言える。

彼は従来の身体について、主に①精神と調和していた古代の身体がキリスト教によって二元化され病み、退化している身体、②ロマン主義的傾向によって気分が不安定で悪習に浸かり疲労している身体、③自身の生理学的限界を知らないがために過労、不眠、栄養過多等に陥っている身体、といった三つの特徴から理解している。

その上で外的要因と内的要因による過度的兆候を示唆する。前者は生活の機械化であり、これによる速度増加によって「身体は目を覚まし身震いする。増大した力からのこの呼びかけを聞く。身体ははしゃぎ回り、走り、跳び、組織を柔軟にし、その振る舞いを完璧にすることを望む」のである。後者は本能的な抵抗であり、「我々の時代の最も素晴らしい発見」である大文字の「健康 *la Santé*」への自覚が要因となるのである。この兆候を経て従来の身体が「新身体」へと脱却しなければならないことを論じている。

「人間は神々から特権を与えられた特別な存在ではない。それは普遍的な物理 - 化学においてはその法則に従順なエネルギー変圧器 *un transformateur d'énergie* である」と述べられるように、もはやキリスト教下における、またはロマン主義的な観念で把握される性格のものとして身体は定義されない。明確に測定可能な物理 - 化学の世界に投入された身体は、近代身体文化の身体理解にも共通するものであり、「生理学が全てである」という彼の言葉にあるように、生理学の正確な知識に基づき再解釈される必要のある身体である。

「我々は自分の精神を司祭に譲り渡したように自分の身体を医師に譲り渡してしまった。生はその歩みの中で医師や司祭を超越した。彼らにはもはや我々の世話をすることは不可能である。我々はアルファベットから始めて自分で健康を学ばなければならない。」彼は医師でありながら、医師の不在による健康を提示する。それは治療を必要としないものであり、「全ての教義から解放された彼自身の、彼の運命の最終的な主人であるところの人間は一人で生きることができる」という言葉の通り、医師ではなく自分が自らの身体を正確に理解し、維持・管理することで成し遂げられる近代的健康である。

その上で「新身体」は、彼が「古い二元論は死に、あらゆる近代生理学によって無効にされた」と述べているように、精神との調和を可能にする前提となる。「生理学が全てである」という彼の言葉はこの意味において再解釈できる。そしてこの精神とは「新精神」である。「真の新しい精神は新しい身体においてしか存在できない。」つまり「レスプリ・ヌーヴォー」誌の運動の大前提として、彼の「新身体」が用意される必要があるというのだ。「新身体」はさらに、新精神を受け入れる単なる器、単なる肉体に留まらず、新精神との総体として掲げられる。それは彼の言葉によれば「新しい精神に富む

新しい身体」である。

6. ピエール・ウィンターの「スポーツ le sport」概念

この身体を理解し管理する具体的な方法として「スポーツ le sport」が位置づけられる。彼は 16 号に掲載の論文「スポーツ」を「スポーツ le sport は一つの方法である。広義の健康（大いなる健康 LA GRANDE SANTÉ）がその目的である」という言葉で始めている。ここでの「広義の健康（大いなる健康）」とは、病気からの回復としてではなく、常に存在し増進される近代的健康と解釈できる。この考えはル・コルビュジエも共有しており、彼は近代医学とは「病人を治療するのではなく健康な人間をつくる」ものだという解釈を示している³¹。ウィンターは「スポーツ le sport」を自分の身体の秘訣を知るプログラムと捉え、それを「革命」と呼び、30 年代には「一つの奇跡」と呼んだ³²。

近代的健康のため身体文化という行為によって自律して身体を理解し、管理し、邁進していくこの過程において身体は「新身体」である。このことからウィンターの理論はさらに展開し、身体と精神の二元論をも「スポーツ（大文字の S で）le Sport (avec un grand S)」はそれを解決する」と述べる。括弧書きでわざわざ注釈しているように、ウィンターの「スポーツ le sport」概念は、近代的健康、生理学的に理解され管理される新身体、新精神との総体としての新身体を導く、拡大解釈された「スポーツ le sport」なのである。

この「スポーツ le sport」は、従来の身体が物理・化学の世界に投げ込まれたように、経験論から脱し「機械的スポーツ les sports mécaniques」に置き換えられたものと内容規定される。「機械的スポーツ」は「科学的制御 le contrôle scientifique」を受け、脈拍や呼吸数といった身体固有のリズムを理解させ、心臓や肺との調和の法則に基づいて内容を決定する。これはテーラー主義の「科学的管理法 scientific management」を髣髴させる。身体を「最小限の消耗を伴う最大限の効率をもつ一つの機械」と形容していることから、テーラー主義の影響は確実である。この生理学に基づく身体的活動によって身体を生理学的に正確に理解可能とするのである。

この生理学的に正確に理解される身体は「人間機械」とも表現される。「有名なランナーのブーアンは彼の呼吸リズムを完全に制御するに至っていた。—（略）—彼はまさに人間機械、人間ストップウォッチであった。」ウィンターはブーアンを「真のチャンピオン」と呼び、そのバランス、リズム、速度の美を群衆は理解できないと言う。彼は近代的健康を目的とした身体文化を主張する一方、彼やル・コルビュジエが生涯批判してきたはずのスペクテイター・スポーツそのままに、健康を希求する群衆を観客席に置き、「新身体」を理解できないままにする。ここで矛盾を感じるが、「真のチャンピオン」を「新身体」を成した者と捉えるならば、群衆は従来の身体に安穩としているという意味で区別を示したと解釈することもできる。

彼は論文「新身体」を締めくくるにあたり、「身体は太陽の下に裸になって、シャワーを浴びて、筋肉を鍛えて、しなやかになって、再び現れる」と述べる。この一節について、ル・コルビュジエの「建築は光の下に集められた諸ヴォリュームの巧妙で正確、素晴らしい働きである」との類似性を指摘する研究がある³³。ウィンターが創刊号に掲載されたル・コルビュジエのこの論文に感激を受けたことは推察できるが、ル・コルビュジエの「光の下」は視覚的效果を、ウ

インターの「太陽の下」は物理・化学的效果を保証するものである。つまり大気浴や日光浴療法、裸体主義等と関係があると考えられる。裸体の健康性はスポーツやジムナスティークにも取り入れられ、例えばエベールのメトード・ナチュレルでは裸のまま屋外で運動する。第 8 回オリンピック・パリ大会のポスターは裸体で行進する男性の列を描いている。その大会の開会式の模様を伝えるジャン・ジロドゥー Jean Giraudoux (1882-1944) の文章は「ときには貧しい国家が、そのスポーツ委員会に資金がないので、あまりに恥ずかしいけれども裸で行進した。しかし裸体はアスリートの豊かさであるし、人は彼らの豪華な筋肉や億万長者の太腿に喝采を送った」と裸体を称えている³⁴。ウィンターが古代の身体を調和したものと捉えていたことから、ギムナシオンやパライストラで裸体で鍛錬していた古代ギリシャにも遡及可能であろう。古代ギリシャでは健康的効果のため、各部位の発達度の確認のため³⁵、洗練された身体の表明のため³⁶、裸で鍛錬や競技を行った。あらためてウィンターの先の言葉を解釈すれば、彼の身体は清潔になり鍛錬されて、太陽の健康的効果を浴び、洗練された身体の内実をさらけ出す、ということになる。これが彼の「新身体」の理想の姿だと言える。

7. ピエール・ウィンターの身体文化と建築

「アスリートの幸福感は世界を貫いている途中であり、その威光は無限となろう。画家、彫刻家、詩人、あなた方は全てそれを受けよう。一人の新しい芸術家が生まれるだろう。彼は既に生まれている。既に新しい精神は一つの総合を行っている。」彼はこのように「スポーツ le sport」が他分野に影響し、芸術家も従来の「神のように生きる」ことを脱し「科学のデータ」を採用する、と考える。

さらに生活スタイルや生活環境も改革すると唱える。「人間の生（活）は経験主義から脱し科学的制御を受けなければならない。」この変革のためには心性、生活時間、生活環境の変革が必要とされる。生活時間は、各行為をテーラー主義に基づき効率よく行うことで、スポーツのための時間を獲得するよう変革されなければならない。生活環境は温泉施設、プール、屋上の活用、摩天楼の採用により変革される。摩天楼により解放された地面と屋上が日々の身体文化のために利用されるということであろう。ル・コルビュジエの「300 万人の現代都市」計画（1922）以前にウィンターはこの考えを公表しているが、ル・コルビュジエの考えに明らかに影響を受けている。彼はル・コルビュジエの都市と建築を早い時期から賞賛していた。「いつ我々はル・コルビュジエの住居を、都市を、室内を手にするだろうか？ まもなく、まもなく、というのも我々は生きるための新しい環境を必要としているのだから。」彼にとってル・コルビュジエこそ、いまだ実作は少ないものの、新精神と新身体の総合を果たした芸術家なのである。彼はル・コルビュジエの住居について更に続ける。「我々は今のみすばらしい住まいにうんざりしている。我々は空気を、シャワー室を必要としている。我々は自分の剥き出しの肌の上に太陽をまるごと欲する。」この特徴はまさにル・コルビュジエが計画していく浴室であり、前述の「太陽の下に裸になって、シャワーを浴びて」再び現れる「新身体」像にこそ相応しい住まいである。彼にとってル・コルビュジエの都市と建築は、彼の理論に相応しく具体化された計画であり、彼はル・コルビュジエを賞賛し参照することで、自身の理想的な健康都市を表現したのである。

「スポーツ le sport はこの大規模なユートピアの実現へと我々を導くに違いない! スポーツ le sport は生(活)に秩序の要素を導入する。それは身体知識を与える。それは衛生を要求する。それはあまりにも古い環境全ての破壊を強く要求する。それは労働と休息を支配するバランスの法則を導入する。それは古い振る舞いに正確さと調整を教える。」このようにウィンターは「スポーツ le sport」があらゆるものを決定すると信じている。それは身体とその生活時間に科学的制御をもたらし、生活環境もそれに対応するべく再建する。彼がル・コルビュジェの都市計画に期待するのは身体文化のユートピアなのである。

8. まとめ

「レスプリ・ヌーヴォー」誌の編集時期におけるウィンターの身体文化の理論を明らかにするべく、まず近代の身体文化と建築の諸相を示し、当該が表現した身体文化観を明らかにした。近代の身体文化は健康を目的とする一方、チャレンジ精神等の近代的心性を示し、当時の人々の生活スタイルや建築にその現れを見ることができた。当該ではチャレンジ精神の結果としての記録に着目する一方、身体文化が「新精神」の通底する活動の一つとして捉えられていた。

次いでウィンターがル・コルビュジェと生涯にわたる協働関係にあったことを示した上で、彼の理論を以下のように明らかにした。

- ①「新身体」は医師でなく各自が自分の身体を自律的に、生理学の正確な知識に基づき維持・管理するもので、健康である。
- ②「新身体」は新精神を受け入れる前提であり、新精神との総体である。
- ③「新身体」の理想は、清潔になり鍛錬されて、太陽の健康的効果を浴び、洗練された身体の内実をさらけ出す姿である。
- ④「スポーツ le sport」は、積極的、自発的に健康へと邁進する方法であり、①と②の意味における「新身体」を導く。
- ⑤「スポーツ le sport」は、生活時間や生活環境も決定する。
- ⑥ウィンターにとってル・コルビュジェは新精神と新身体との総合を果たした芸術家であり、彼の理論を具体化できる建築家である。

ここでの結論に基づき、次回さらにル・コルビュジェの身体文化観を明らかにしていく。

註

¹ 論文中「スポーツ」については、フランス語の le sport (ル・スポール) と les sports (レ・スポール) を区別して表現する。近代オリンピックの創始者ピエール・ド・クーベルタンがフランス語の慣習的な使い分け以上に、前者を本質概念、後者を個々の競技の一つまたは集合を指す概念として規定し、使い分けていたとする清水重勇の研究に従い、区別する。表記については、前者を括弧書きの「スポーツ le sport」、後者を括弧書きのない「スポーツ」とする。

² フランス語の la culture physique。例えばジェームス・リオーダンはスポーツ等の身体活動を包括する概念として位置づけ、アンジェイ・ヴォールは様々な身体活動の思想や制度等も含めた体系であり、活動そのものの上位概念と位置づけた。ヘニング・アイヒベルクは、スポーツ等の身体活動を身体から展開する文化として捉え、このような文化としての身体を身体文化として位置づけた。本論文ではこれら先行研究の理解に従いつつ、身体を単なる文化ではなく病気や健康や死に直結している生々しい生として捉える。

³ Ernst Bloch, Das Prinzip Hoffnung, Suhrkamp Verlag, 1959. (邦訳:『希望の原理』第二巻, 山下他訳, 白水社, 1982, pp. 13-14.)

⁴ Lewis Mumford, The culture of cities, Brace and Company, Harcourt, 1938 (邦訳:『都市の文化』生田勉訳, 鹿島研究所出版会, 1974, p. 505.)

⁵ Beatriz Colomina, The Medical Body in Modern Architecture, in Daidalos, 1997. 6.

⁶ Mark Wigley, White Walls, Designer Dresses, MIT Press, Cambridge and London, 1995, pp. 119-123.

⁷ Thomas A. P. van Leeuwen, The Springboard in the Pond; An Intimate History of the Swimming Pool, MIT, Cambridge & London, 1998, p. 9.

⁸ Le Corbusier, Sur les quatre routes, 1941; Re Éditions Denoël, Paris, 1970, pp. 190-191.

⁹ Pierre Charreton, Les Fêtes du Corps; Histoire et tendances de la littérature à thème sportif en France 1870-1970, Université de Saint-Etienne, 1985. (邦訳:『フランス文学とスポーツ 1870-1970』三好郁朗訳, 法政大学, 1989, p. 107, 117.)

¹⁰ ibid. (邦訳; p. 56.)

¹¹ Gladys C. Fabre, L'esprit moderne dans la peinture figurative de l'iconographie moderniste au modernisme de conception, dans Legér et l'Esprit Moderne, musée d'art moderne de la ville de Paris, 1982, p. 130.

¹² 前者は D' St-Quentin, Sports, dans l'Esprit Nouveau, n°11-12, 1921. 11., p. 1366.; 後者は Sports, dans l'Esprit Nouveau, n°15, 1922. 2., p. 1754.

¹³ l'Esprit Nouveau, n°24, 1924. 6..

¹⁴ Johan Huizinga, Homo ludens; Proeve eener bepaling van het spel-element der culture, 1938. (邦訳:『ホモ・ルーデンス』里見元一郎訳, 河出書房, 1989.)

¹⁵ 清水重勇, 『フランス近代体育史研究序説』, 不昧堂出版, 1986, p. 214.

¹⁶ D' St-Quentin, op. cit.; 「St-Quentin」及び【表 1】中の n°18 の「0.」はオザンファン・ペンネーム。

¹⁷ Le Corbusier-Saunier, Des yeux qui ne voient pas: les autos, dans L'Esprit Nouveau, n°10, 1921.

¹⁸ Pierre Winter, Le Corbusier, Biologiste, Sociologue, 1936. 2, dans Le Corbusier œuvre complète, vol. 3, 1938.

¹⁹ François de Pierrefeu et Le Corbusier, La Maison des Hommes, Librairie plon, Paris, 1942, p. 1.

²⁰ École Française de Rythmique et d'Éducation Corporelle société anonyme; Statuts, Paris, 1923. (FLC II-8-60)

²¹ Pierre Winter, op. cit..

²² ル・コルビュジェ財団の保管する手紙の中で、ナンジェセール-エーコリ通り 24 のアパルトマン購入について初めて触れたのは、ウィンターからル・コルビュジェへの手紙 (1931. 8. 13) (FLC R3-7-384)。手紙の宛先が初めて同所になるのは、ル・コルビュジェとピエール・ジャンヌレからウィンターへの手紙 (1934. 8. 7) (FLC R3-7-392)。ちなみにル・コルビュジェの入居はフォン・モースによれば 1933 年。

²³ Pierre Winter, Le point de vue du biologiste, dans Pierre Winter, Le Corbusier, Charles Trochu et Paul Boulard, Architecture et Urbanisme, Les Publications techniques, Paris, 1942, p. 38.

²⁴ FLC R3-7-443~445 (1947. 3. 18.), R3-7-449 (1950. 6. 22.).

²⁵ FLC R3-7-446, R3-7-449, R3-7-460~461.

²⁶ FLC R3-7-425 (1940. 9. 26.).

²⁷ FLC R3-7-460~461 (1952. 7. 2.).

²⁸ Pierre Winter, Le Corbusier, Biologiste, Sociologue, 1936. 2, dans Le Corbusier œuvre complète, vol. 3, 1938.

²⁹ Robert Aron, Première Olympique, le Paradis à l'ombre des épées, par Henry de Montherlant, dans L'Esprit Nouveau, n°23, 1924. 5.

³⁰ Pierre Winter, Sports, dans L'Esprit Nouveau, n°14, 1922. 1. 以後のウィンターの引用は、註がない限り、全て同論文と le Corps nouveau, dans L'Esprit Nouveau, n°15, 1922. 2. 及び Sports, dans L'Esprit Nouveau, n°16, 1922. 3. から。

³¹ Le Corbusier, Atomosphère Moscovite, 1930. 3. 20., dans Précisions sur un état présent de l'architecture et de l'urbanisme, les éditions g. crès et c^{ie}, Paris, 1930, p. 263.

³² Pierre Winter, La médecine, Science de la santé, dans Plans, n°1, 1931. 1.

³³ Reyner Banham, The Architecture of the Well-tempered Environment, Architectural Press, England, 1969. (邦訳:『環境としての建築; 建築デザインと環境技術』堀江悟郎訳, 鹿島出版会, 1981, p. 150.)

³⁴ Jean Giraudaux, Français amoureux aux Jeux Olympiques, dans Œuvre Romanesque, tome II, Grasset, France, 1955, p. 435.

³⁵ 水野忠文, 『体育思想史序説』, 世界書院, 1967, p. 33.

³⁶ Věra Oliyová, Sports and Games in the Ancient World, ORBIS Publishing, London, 1984. (邦訳:『古代のスポーツとゲーム』阿部・高橋訳, ベースボールマガジン社, 1986, p. 131.)

(2004年5月10日原稿受理, 2004年8月2日採用決定)